

21. わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。
22. その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』
23. しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』

説教

これはイエスさまが山の上で弟子たちに教えた山上の説教の一節です。イエスさまは神の国について一通り教えてから、その締めくくりとして、教えたことを行うよう、いくつかの話をなさいます。その最初が「狭い門から入りなさい」です(13-14)。それから「にせ預言者」に警戒するよう教え(15)、さらには「にせ預言者」の見分け方として、その「実」によって中身の真偽を判別できると教えます。そうして21節以降では、どういう人が天国に入ることができるのかを明らかになさいます。

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者が入るのです。」(21) これによると、イエスさまに向かって「『主よ、主よ。』と言う者」全員が必ずしも「天の御国に入るのではない」ようです。「『主よ、主よ。』と言う者」とは、いわゆるキリスト教の信者のことです。教会に通い、洗礼を受け、あるいは熱心に求道します。ある者は、長年教会に通い、教会の役職を務め、教会の内外から良い評判を得るでしょう。熱心に讃美し、熱心に聖書を読み、熱心に祈ります。「主よ、主よ。」と祈る姿は、誰が見ても文句なしの立派な信者です。

でも、イエスさまは言われます。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国に入るのではない」。そして、誰が天国に入ることができるかを明らかになさるのです。「天におられるわたしの父のみこころを行なう者が入るのです。」

ちなみに、「主よ、主よ。」と呼ばない者に関しては論外ということが、ここでの暗黙の前提となっています。主の御名を呼び求めない者は救われません。主の御名を呼ぶ者が救われます。しかし、主の御名を呼ぶ者は救われますが、その全員が救われるわけではない、中には救われない者もいるというのが今日の話です。

天国には入れない「大ぜいの者」について、次のように説明されます。「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」(22-23) 「その日」とは、世界の歴史が終わる日、最後の審判の日のことです。最初の人間アダム以来の全人類が、神の前に引き出されて、審判される日が来ます。そうすると「にせ預言者」の正体も暴露されます。全人類は、最後の審判の日に、天国と地獄に振り分けられます。その際、「大ぜいの人」が審判者イエスさまの前で言います。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。」

あらためて確認しますが、ここに登場する「大ぜいの人」は「キリスト教徒」以外を意味するものではありません。教会に通い、教会の内外で祈り、証する「キリスト教徒」のことです。しかも、単に「主よ、主よ。」と主イエスの名を呼ぶだけではなく、「あなたの名によって」とあるように、イエスの名によってクリスチャンとして活発に奉仕をするのです。「預言」とは神のことばを語ることです。この「大ぜいの者」は、人々に神のことばを語る「預言」をしていたと言うのですから、彼らの中には牧師もいたことでしょう。それ以外にも、クリスチャン社会人として様々な分野で「預言」活動をしていたことでしょう。あるいは、単にごく普通の一市民として素朴に神さまを証ししていたのかも知れません。「悪霊を追い出す」とは、悪霊に憑かれて困っている人から除霊して助けをあげることですが、いかにも神から力をいただいて行っ働きに見えます。しかも、「奇蹟をたくさん行なった」と言われます。「奇跡」と訳されている言葉には「全能の力あるわざ」という意味があります。

ですから、この「大ぜいの人」は、キリスト教界でも多くの力ある働きをして大活躍した大伝道者、あるいはキリスト教界を代表する有名な牧師だったのかも知れません。彼らは、イエスの名によって神のことばを「預言」し、イエスの名によって「悪霊を追い出し」て多くの人を助け、イエスの名によって神の力ある全能の働きをたくさん行って、ノーベル平和賞を受賞するほどの大活躍で教会の内外に名を挙げました。これほどの良い働きをしてキリスト教の普及に大きな貢献をしたのですから、その意味では天国に入るに相応しいように見えるし、天国ではどれほど大きな褒美が彼のために用意されているのかと思います。

でも、イエスさまの答えはこれとは正反対でした。イエスさまはこの「大ぜいの者」にこう宣言すると言われたのです。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」(23)「わたしから離れて行け」とは、天国の王さまであるイエスさまから見捨てられて、イエスさまのいる天国には入れない、イエスさまのいない地獄へと突き落とされるといふ、最も厳しい永遠のさばきの宣告です。

イエスさまは、彼らのことを「全然知らない」と言われます。この「知る」と訳されている言葉は、単に「気づく」とか「認識する」といった軽い意味ではありません。これは「深く悟る」「体得する」「特別な関心を持つ」「特別な関係にある」といったとても強い表現です。つまり、イエスさまは彼らの行っていることを知らなかったわけではなく、むしろすべて知っておられたのです。彼らがイエスさまの名によって預言し、悪霊を追い出し、多くの力ある働きをしていたことをすべて見ておられました。にもかかわらず、イエスさまは「わたしはあなたがたを全然知らない」と言われたのです。それはこう言うに等しいことです。「確かに、わたしはお前たちがわたしの名によって預言し、悪霊を追い出し、多くの華やかな働きをしていたのを見た。でも、言っておくが、わたしはお前たちのことなど全然知らない、関心も無いし、関係も無い。」

どうしてイエスさまはそう言われたのでしょうか。彼らはイエスさまの名により多くの良い働きをしました。そして、それをイエスさまはすべて見ておられました。それなのに、どうしてイエスさまは「わたしはあなたがたを全然知らない」と言われたのでしょうか。

その理由は、何より彼ら自身がイエスさまを知らなかったからです。彼らがイエスさまを知らないのに、イエスさまもまた彼らを「全然知らない」と言われたのです。勿論、彼らは知識としてはイエスさまを知っていました。それで、イエスさまの名によって預言をし、悪霊を追い出し、たくさん力ある働きをしました。でも、それでも彼らはイエスさまを知りません。と言うより、イエスさまには少しも関心がありません。イエスさまの働きはしてはいたけれども、イエスさまのことはどうでもよかったのです。だから、イエスさまのためにしていたわけではありません。イエスさまの名によって預言をし、イエスさまの名によって多くの人を助けて良い働きをしてはいたけれども、イエスさまのためにしていたわけではありません。

それなら、いったい誰のためにしていたのでしょうか。自分のためです。自分の利益のためです。果たしてそん

なことがあるのかと思いますが、それが実は彼らの働きの本質でした。彼らはイエスさまのために生きたのではなく、自分のために生きてきたのです。その証拠に、此の期に及んで何を言うかと思えば、「あなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか」と、彼らは人生に於ける自分の功績を数え上げます。自分たちがどんなに良いことをしたのかを列挙します。自分が何をしたのか、どういう社会貢献をしたのか、どれほど立派に生きたのか、これが彼らの人生そのものでした。しかも、「あなたの名によって」そうしてあげたと言うのですから、それはあたかも自分がイエスさまの名をこの世に広めるために大きな営業成績を残した、否、イエスさまのために「これほどしてやったんだぞ、わかってんのか」と言わんばかりです。

つまり、このことからはっきり理解できることは、彼らの生涯にはイエスさまはおられなかったという事実です。もっと言えば、彼らはイエスさまの恵みを知ることがありませんでした。イエスさまの恵みを知らないで、自分がこの世でやってきたことしか思い浮かばなかったのです。

そもそも、彼らがこの世で多くの良い働きをしていくことができたのは、彼ら自身の能力や功績によるものではありません。すべては神の恵みだからです。もしも彼らが本当にイエスさまを知っていたなら、同じ内容でもこう言ったはずです。「主よ、感謝します。あなたは私たちに預言させ、多くの力ある働きをさせ、人助けをさせてくださいました。すべてはイエスさまの恵みです。」これがイエスさまを知る者の告白です。それなのに、彼らはこの世で自分たちが何をしてきたのか、自分の功績を挙げ連ねることしかしませんでした。神の恵みを知らなかったからです。イエスさまの愛を知りませんでした。イエスさまが彼らをどれほど愛し、どんなに恵んでくださったのか、そんなことには少しも関心がありません。神のすばらしさではなく自分のすばらしさ、自分がどういう良いことをしてきたのか、ただそれだけです。しかも、自分の罪深さについては一言も言わずに、それをすっかり隠して、あるいは、そんな自覚など全く無かったのかも知れませんが、ただ自分の良いことだけを矢継ぎ早に列挙します。それはいかにもこの世的です。この世ならそれでよかったですでしょう。よくやった、よく頑張ったと、称賛を得て栄光の冠を受けることができたことでしょう。でも、神の前では、それは少しも役に立ちません。神の前にはすべてが明らかだからです。神はすべてをお見通しです。神の前には何一つ誇れるものはありません。神の前には私たちはただただ罪人だからです。神の怒りを受けて、打たれて殺され、永遠の地獄に投げ入れられて然るべき者です。どんなに格好つけても、どんなに飾り立てても、どんなに見栄を張っても、神の怒りを免れることができるほど罪深くない人間はこの世にひとりもいません。それなのに、この死ぬべき罪人が、いったいどの面下げて「私はこんなに良いことをしました」と胸を張って自慢することができるのでしょうか。

神をずうっと無視して生きてきた「大ぜいの者」に、イエスさまはこう宣告なさいます。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」「不法」と訳されている言葉は、律法を否定する「律法の無い状態」「不律法」「無法者」「神の律法に背く者」を意味します。イエスさまから地獄行きを宣告された「大ぜいの者」は、神を知らず、神のみこころを無視して、自分勝手に生きたので、「不法をなす者」と呼ばれるのです。

神はどんなに大きな恵みを私たちに与えてくださったことでしょうか。私たちをこの世に造り、いのちを与えてくださいました。生きるのに必要な一切の日毎の糧を与えて私たちを養い、育てて、今日まで生かしてくださいました。これを行えば生きるという神のみこころである律法を与え、同時に、それを破ってしまう弱く罪深い私たちのために救済の道も与えます。ひとり子イエスさまをこの世に送り、私たちの身代わりに十字架につけて、私たちの罪を贖ってくださいました。こうして、罪深い私たちを地獄の滅びから救い出して、天国に入れてくださいました。神は、私たちのこの身と魂とを生かしてくださいました。そしてこの世で、いのちある限り、神の恵み

を証しさせていただきます。良い働きをさせていただきますのです。

イエスさまは言われました。「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者が入るのです。」(21) 「天におられるわたしの父のみこころを行なう者」、その人が天国に入る、そうイエスさまは言われました。「天におられるわたしの父のみこころ」とは何でしょうか。(これまでイエスさまが説教してきた内容の全体と言えますが、その前提として)それはまず、神の恵みを知ることです。永遠の滅びを宣告された「大ぜいの者」のように、自分が何をしたのか自分の良さを数え上げるのではなく、神の恵みを数えなければなりません。神がどれほどこの私を愛し、どれほどの大きな愛で生かしてくださってきたのか、それをまず思い知らなければなりません。そうして、その神の愛によって生かされている喜びと感謝をもって、神と人を愛します。神をほめたたえて、神の愛を隣人に証しします。

地上でどんなに良き働きをしても、それは神の恵みなのです。自分の力や立派さによるものではありません。自分はこんなに罪深い者だけれども、永遠に死ぬべき話にならない罪人だけれども、それでも神はこんな者を見捨てることなく愛し、生かし、ご自身の恵みを伝える者として用いてくださるのです。

結局、私たちの全生涯は、ただ神の恵みを知って、これを喜んで人々に分かち合うだけの人生に過ぎません。でも、だからこそ、これは最高に価値ある人生とも言えます。神のすばらしさ、神の偉大さを証しする人生だからです。それは、神の栄光に照らされた栄光の人生であり、天の光をこの世に反射してこの世を照らす、最高に希望ある、明るい人生と言えます。そして、これこそが、神と共にある永遠のいのち、永遠の天の御国へと続いていく、この上なくすばらしい人生なのです。

ここに集う一人一人が、神の恵みを知り、神の恵みに心から感謝して、その恵みに応えて生きるよう、主の御名により祈ります。